

産褥期における発熱と乳量・飼料摂取量 および疾病発生との関係

乳牛では産褥期に疾病が多発し、多大な経済的損失を招いています。乳牛の健康状態を監視する有効な手法の一つとして体温測定があり、近年産褥期の定期的な体温測定が推奨されていますが、生産現場ではその有用性が未だ浸透していません。そこで、北海道立根釧農業試験場では産褥期の乳牛において発熱状況と健康状態の関係および飼養成績に与える影響について調査し、定期的な体温測定の有用性を実証しました。

☆ 技術の概要

1. 分娩後 13 日間に初産牛は 60%、経産牛は 39%の牛で発熱しました。発熱牛群の体温推移は分娩後 3 日目に最高体温を示しました。定期的な体温測定により、発熱牛の約 70%を分娩後 4 日目までに検出することが可能であることが分かりました。
2. 分娩介助を行なった初産牛は発熱する割合が 84%と有意に高く、また初産牛では胎盤停滞および子宮・膣の炎症を発症した牛のほとんどが発熱しました（表 1）。
3. 分娩後に発熱する初産牛では産褥期の乾物摂取量が有意に低下し（ $P < 0.01$ ）、経産牛では産褥期の乳量が低い傾向にありました（ $P = 0.07$ ）。
4. 表 2 に産褥期における体温測定のポイントを示します。

表1. 分娩後13日間の疾病発生状況および発熱状況

産次	疾病	疾病発生率 ¹⁾ , %	発熱牛の割合 ²⁾ , %
初産牛	分娩介助	48 (19/40)	84 (16/19)
	産褥熱	10 (4/40)	100 (4/4)
	胎盤停滞	18 (7/40)	100 (7/7)
	子宮・膣の炎症	30 (12/40)	92 (11/12)
	乳房炎	20 (8/40)	88 (7/8)
経産牛	分娩介助	22 (14/64)	36 (5/14)
	産褥熱	5 (3/64)	100 (3/3)
	胎盤停滞	14 (9/64)	67 (6/9)
	子宮・膣の炎症	11 (7/64)	57 (4/7)
	乳房炎	44 (28/64)	46 (13/28)

1) 疾病を併発している場合、それぞれを 1 件として集計

2) 各疾病に罹患した牛のうち発熱した牛の割合。

*カッコ内は実頭数

表2. 産褥期における体温測定のポイント

1. 早朝の給餌前の安静時に体温測定を行なう。
2. 排便直後に測定するのが望ましい。
3. 直腸への体温計挿入時は、直腸壁を傷つけないように注意する。
4. 対象牛、測定期間の優先順位は以下とする。

優先順位	対象牛	測定期間
①	分娩介助を行なった初産牛	分娩後4日間
②	分娩介助を行なった全頭	分娩後4日間
③	全頭	分娩後4日間
④	全頭	分娩後13日間

活用面での留意点

本成績の知見は、産褥期における乳牛の体温測定による健康管理に利用できます。本成績における体温とは直腸温です。詳細は、北海道立根釧農業試験場（TEL:0153-72-2042）にお問い合わせください。